
笑顔

月城レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑顔

【Nコード】

N9622S

【作者名】

月城レイ

【あらすじ】

GW突然の新一の両親の訪問に、哀は勇気を振り絞って有季子に告白する。すると有季子に一つの約束をお願いされ…。有季子に対する哀の思いを書いてみました。

「母さん!？」

「博士来ちゃった」

「おお有季子君に優作君いらっしやい」

見事に息子の驚きの声をスルーしはしゃぐ妻と友人の後ろから優作はゆつくりと姿を現した。

「父さんまでつどうしたんだよ」

多忙なはずの両親の突然の登場に新一は素っ頓狂な声をあげた。

「旅行よ、りよ、こ、う」

GWなんだからたまにはいいじゃないとはしゃぐ有季子をいとおしげに見つめ、優作はというわけだと両手を広げて見せた。

薄暗い地下室でパソコンに向き合う小柄な少女がいた。彼女の名前は灰原哀。本名を宮野志保という。

自らが開発していた薬で幼児化した彼女は一日でも早く解毒剤を開発すべく休日返上で仕事をしていた。

階段を下りてくる足音を聞きつけ、作業の没頭していた体をゆつくりと伸ばす。

コンコン。

「どうぞ」

いぶかしげに入室を促し、入ってきた人物に会いは息をのんだ。

「工藤君のお母さん」

「こんにちは、哀ちゃん」

明るく話しかける有季子に対し哀は顔を曇らせた。

「哀ちゃん?どうかした」

「……」

哀が何かを言いたいのを察し、由紀子はあえて明るく尋ねた。よほど話しぶらいことなのか哀は沈黙したままである。

「…新ちゃんのこと？」

はっと哀は顔をあげた。

逃げちゃだめ。自分で引き起こし事の責任は取らなくてはいいけない。

まっすぐに、有季子を見つめ震えそうになる声を抑える。

「貴女に謝りたくて…息子さんをあんな体にしてしまつて申し訳ありません。必ず、必ず息子さんは命に代えても元の体に戻して見せます。だから、もう少しだけ、時間をください」

一息に言いきつて哀はこぶしを握り締めた。どんな罵倒も非難も受けるつもりだった。

「志保さん…というのよね。きちんとむきあつてくれてありがとう」

そう言つて有季子は綺麗にほほ笑んだ。

「新ちゃんが小さな体になつてしまったことは、どれほど悔やんでもその事実を消すことはできないわ」

その通りだ。工藤新一という時間は今この瞬間ですら失われて行つていくのだから。自分のしでかしてしまつた現実に、胸が鋭く痛む。

「でもね、新ちゃんは生きていたわ。だからいいのよ。望んでできる経験じゃないもの。得難い機会をあの子は手にしたの」

だつてそうでしょと哀の瞳を覗き込む。あの自信家の新ちゃんが挫折を知つて、同年代の女の子と運命を共にして悪に立ち向かう。ロマンチックだと思わない。

「もう自分を責めないで哀ちゃん」

どれほどの思いでこの言葉をくれているのだろうこの人は。息子が大事件に巻き込まれて心配でないはずがないのだ。それなのに、私のような罪を犯した女まで気にかけてくれる。貴方のお母さんはすごい人ね、工藤君。

「私は…」

「だめよ、哀ちゃんそれ以上言っちゃ」

哀の気持ちを見透かしたように有季子がさえぎる。

「もし、どうしても自分を許せないって言うなら一つだけ約束して頂戴」

「約束？」

不安げな哀に有季子は満面の笑みで告げた。

「私の家族に哀ちゃんの笑顔を見せて頂戴」

途端に目を丸くする哀に有季子は目を細めた。

——哀ちゃんてほんとに可愛い。娘に欲しかったわ。

「笑顔…」

「そっ笑顔」

「おっどうしたんだよ灰原」

母親に押されうつつむきがちに上がってきた灰原に気が付きコナンは声をかけた。

「並んで頂戴」

「はっ？」

意味がわからず聞き返すコナンには構わず、ぐいぐいと優作の方へと押しやる。

ちゃっかりと有季子がすでに優作の腕に抱きついているのを確認し、灰原は三人の前に立ち息を吸った。

「……いつもありがとう、工藤君」

勇気を振り絞って笑顔でコナンに感謝を告げる。

するとみるみるうちにコナンの顔が真っ赤になるが、恥ずかしくてうつつむいた哀は気がつかない。

「あら、新ちゃん？」

「おやつ…」

両親の楽しそうな声にますます赤くなったコナンは、驚いた顔の

博士と目が合いいたたまれなくなる。

「あの…灰原さん？」

「何よ…」

ぶっきらぼうな声になんとなく安堵するコナンであった。

（後書き）

誤字脱字等お気づきの点がありましたら、お知らせいただけると助かります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9622s/>

笑顔

2011年10月4日19時07分発行